

二〇二〇年度 卒業論文

SDGs に向き合う浄土真宗

L170064

鷲見 了我

目次

序論	1
本論	3
第一章 SDGs と現代社会の課題	3
第一節 SDGs とは	3
第二節 SDGs ムーブメントについて	5
第二章 SDGs に向き合う浄土真宗	8
第一節 老後の働き口を作る寺	9
第二節 浄土真宗が発信できる価値観	11
第一項 救われている確信	11
第二項 ありのままの自分	13
第三節 浄土真宗と教育	15
第一項 非認知能力について	15
第二項 非認知能力を育むために	17
第三項 浄土真宗における非認知能力の育成	18
第四節 教誨師として	19
第五節 寺院と医療	22
結論	23
註	
参考文献	

序論

私たちが生きている今の社会には非常に多くの格差が存在する。ジェンダーによって社会進出における難易が決まる差。経済状況によって受けられる教育の質が決まる差。出自の国、地域によって開かれる未来が決まる差。一言に格差といってもこれらからわかるように多様な側面で格差は生まれる。さらにこの多様に広がった格差は互いに排反な存在ではない場合があるのも実態であろう。例として日本の現教育制度を見れば、義務教育外において塾のような余剰に追加的教育が受けられない経済的な貧しさを持つ子はこの時点で教育の貧しさを経験する。それがそのまま就労の格差、さらに収入の格差へと発展するのだ。しかし格差の解決は非常に難しい。それは格差がまるでフィルターバブルのように人々をうちに閉じ込め、外へと抜け出しづらくするところが大いなのだと思う。誰であっても貧しさから脱したい思いはあるが、一度格差の膜に取り囲まれてしまえば、抜け出すのは容易ではない。

この現状をみて格差を是正しようとアクションを起こしている人々は存在する。そして私たち自身もこれらの格差に向き合って行動していかなければならない。

ここで一つの行動指針として取り上げたいのが SDGs である。これは「sustainable development goals (持続可能な開発目標)」の略称である。これは今生きている人たちだけが豊かに生き、その時に出たツケをこれから生まれてくる世代に残してはいけないという思いから生まれた目標で、今現在生きている人々の要求も満たしつつ、これから生まれてくる子どもたちへ豊かな社会を引き継いでいけるようにするための行動指針である。今現在、世界はこの SDGs の流れに大きく舵を切り、誰一人取り残さない社会を実現するために動き出している。さらにその

ような社会実現を可能にするテクノロジーやイノベーションも生まれてきている。誰でもアクションを起こすことが可能な時代になったのだ。

さてここでこのような社会において浄土真宗ができる事とは何なのかを考えていきたい。世界全体がSDGsを指針に動き出している中、日本において浄土真宗の寺と僧侶は格差に対していったい何ができるのだろうか。

私の考えるところでは、浄土真宗はこの誰一人取り残さない社会実現の一端を担える力があるはずだ。浄土真宗の教義においてそのすべての始まりとは、阿弥陀による一切衆生の救いである。これは第十八願文にみられるところであり、また親鸞の悪人正機説にも窺うところができる思想であるが、まさしくSDGsが目指すところの誰一人として取り残さないという目標と合致する。浄土真宗はそれに宗教の側面からずっと向き合ってきたのだ。

ではここで私が提案したいのは誰一人取り残さない社会に向けて浄土真宗は今までもすでに向き合ってきたのではあるが、それを現代風にアップデートし具体的な実行案として昇華してみようという試みである。

よって本論では次のような構成で進めていく。まず第一章ではSDGsの概要について触れた後、現代社会の課題、そして世界がそれに対してどう向き合っているのかについて論じていく。第二章では前述の内容を踏まえて、浄土真宗並びに日本の寺、僧侶がどう向き合っていけるのかについて議論する。ただ、ここでは具体的な実行案として現行の課題に向き合いたいため、第二章に関してはプロジェクトベースでの取り上げ方を採用する。

本論

第一章 SDGs と現代社会の課題

第一節 SDGs とは

以下は外務省による SDGs の概要である。

持続可能な開発目標（SDGs）とは、2001年に策定されたミレニアム開発目標（MDGs）の後継として、2015年9月の国連サミットで採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ」にて記載された2030年までに持続可能でよりよい世界を目指す国際目標です。17のゴール・169のターゲットから構成され、地球上の「誰一人取り残さない（leave no one behind）」ことを誓っています。¹

ここで SDGs の重要なポイントを抜き出すとしたら次の3点にまとめられる。まず一つ目が、誰一人取り残さない社会実現を最終的なゴールに掲げている点。そして二つ目が、そのために17のゴールと169のターゲットを定め、具体的な行動指針を示している点。最後の三つ目が、この目標は一時的でなく持続可能な長い未来を見据えたものであるという点だ。ではそれぞれについて言及していく。

まず SDGs が掲げる誰一人取り残さない社会実現とはどのような状態を表すかについてみていきたい。この誰一人取り残さない社会とは二つの側面が存在する。一つが社会の多様性に関する視点。そしてもう一つが社会のために犠牲を払う人を生まないという視点である。では前者から具体的に見ていく。

これまでの社会において人類が目指してきた社会のロールモデルとは経団連が提唱する Society3.0 および、Society4.0²にみる事ができる。それは大量生産、大量消費のスケール感によって GDP を生み出して

いく社会で、その過程において、都市一極集中型のモデルが採用され、そこで働く人々には個性の抑圧による均一性が重視された。その結果次のような社会問題が引き起こされたのだ。地方の形骸化とマイノリティをはじめとする個性の規格化である。これらは合理性の名のもとに経済発展のためには仕方がないと軽視されてきたのだ。このロールモデルは今までの工業化社会においては非常に効率的なものだった。しかし悪化する環境の問題や人口減少問題の影響から大量生産による価値の創造は頭打ちになってきている。イノベーションを生み出すアイデアの創造にこそ価値が生まれる時代へと変わってきたのだ³。そのような社会では高度な経済成長と多様性の共存の両軸が回る社会の実現を目指さなければならない。つまりはダイバーシティ&インクルージョンの達成を目指し、経済成長と多様性の共存がトレードオフの関係にないことを証明していくことによって、SDGsが掲げる誰一人取り残さない社会を実現することができるのだ。

次に後者について記述していく。序論でも述べたように今を生活している人たちの欲求を満たすために有限な資源を前借し、未来を生活していく人たちにツケを残すような社会構造であってはならない。また逆に、未来を生活していく人たちのために今を生活している人たちが我慢を強いられるような生き方をさせられてはならない。このように時間軸で見たときの今と未来、すべての人々を誰も犠牲にしないという視点も誰一人取り残さない社会を実現するにあたって重要なものとなってくる。

さて次にSDGsが掲げる17のゴールについて確認する。

1. 貧困をなくそう
2. 飢餓をゼロに
3. すべての人に健康と福祉を
4. 質の高い教育をみんなに
5. ジェンダー平等を実現しよう
6. 安全な水とトイレを世界中に
7. エネルギーをみんなにそしてクリーンに
- 8.

働きがいも経済成長も 9.産業と技術革新の基盤をつくろう 10.人や国の不平等をなくそう 11.住み続けられるまちづくりを 12.作る責任 使う責任 13.気候変動に具体的な対策を 14.海の豊かさを守ろう 15.陸の豊かさも守ろう 16.平和と公平をすべての人に 17.パートナーシップで目標を達成しよう⁴

実に環境問題から貧困、そして労働問題まで様々な視点を含んだ目標であることがうかがえる。これからの未来を作っていく私たちにとってみればどれも非常に重要な視点ではあるが、この論文では 1、3、4、8、10、11 のゴールについて言及していく。そして最後に SDGs が言う持続可能性について解説する。SDGs が言うところの持続可能性というのは専ら環境問題に依存している。今までの経済成長は自然環境の犠牲の上で成り立っていた。しかしこのままでは有限な地球の資源が満身に次世代へと残すことができないという危惧から次の考えが生まれた。それは地球環境と経済成長をどう協調していくのか、もしくはその両軸がともに正に働くような取り組み方はどのようなものであるのかというものだ。これが持続可能性である。

第二節 SDGs ムーブメントについて

SDGs ムーブメントについて書いていく前に、まずその前身であった MDGs⁵との違いについて論じなければならない。なぜならばここまで SDGs の潮流が広まった理由がそこにあるからだ。MDGs は 2000 年の国連ミレニアム・サミットで採択された国連ミレニアム宣言をもとにまとめられた開発目標のことを言い、2015 年までに達成すべき 8 つの目標を掲げていた。結果としては一定の成果を上げたものの、すべての目標を達成するまでにはいかなかった。その反省を生かし、SDGs は次のようにその

取り組み方を刷新したのである。

第一に、MDGs では発展途上国の課題解決を主眼に置かれてその取り組みがなされてきたところを見直し、SDGs では先進国の課題解決もその範疇に置くこととした点。第二に、MDGs では政府や国連など大きな組織がリーダーシップをとっていたところを見直し、より小さな組織である自治体や民間企業であってもイニシアティブがとれるようにした点。この二点である。つまり SDGs で見直された MDGs の不完全な部分というのは格差問題の原因の同定作業である。MDGs を通して格差問題の原因とは単に発展途上国のみでの問題ではないことが分かった。先進国を含めてグローバルな横のつながりにおいて生じた摩擦の結果が格差を生んでいるのである。またその課題解決には政府や国連といったトップダウンの取り組みでは不十分で、より小さいところからアプローチしていかなければならないことも分かった。

では実際どのように各企業が SDGs に関する取り組みを行っているのかについて具体的に見ていきたい。

iPhone を代表するデジタルデバイスや家庭向けデジタル製品、それらに付随するソフトウェアの開発、販売を携わる多国籍企業の Apple⁶。Apple は 2030 年までにそのすべての商品をカーボンニュートラルにすることを宣言している。また製造過程でのカーボンフットプリントについてもゼロにするとしている⁷。

ドイツを代表する自動車メーカーであるメルセデスベンツは自動車の新たな価値として「CASE」を掲げている。これは Connected (コネクテッド)、Autonomous (自動運転)、Shared&services (シェアリング)、Electric (電動化) のイニシャルをとったもので、これまでの自動車の在り方や概念を変える革新的な計画を言う⁸。電動化することでエネルギーの持

持続可能性につながり、自動運転と IoT の発達により MaaS⁹としての車が誕生することであらゆる人々に車を通じたサービスを提供できる。またそのサービスの内の一つとしてシェアリングがあり、これも持続可能性へとつながる取り組みである。この「CASE」には日本を代表する自動車メーカーであるトヨタも SDGs への取り組みの一環として賛同している¹⁰。

ここで上げたのは一例であるが、様々な企業が SDGs に賛同し、ともに誰一人取り残さない、持続可能な社会の実現を目指している。

ただ、これらのグローバル企業が SDGs に関する取り組みを行っているのは、単にその理念に賛同しているからだけではないことも理解しておくべきだろう。そこには「持続可能性」と「ESG 投資」の二つが関係してくる。

まず持続可能性についてだが、企業の長期ビジョンと SDGs が掲げる持続可能性とは互いに相性がいい。資本主義の社会において、企業とは本質的に営利団体であり、その利潤を追求するという使命を持っているものである。そのため一見、持続可能性とは相反するものであるように見える。しかし利益を追求すると同時に持続可能性も追求することによって結果として長期的な利益を得ることができるようになる。より大きな企業になればなるほど、この持続可能性という視点は欠かせないものになってくるだろう。次に ESG 投資についてだが、これは次のことを意味する。

環境 (environment)、社会 (social)、企業統治 (governance) に配慮している企業を重視・選別して行う投資。国際連合が 2006 年、投資家がとるべき行動として責任投資原則 (PRI: Principles for Responsible Investment) を打ち出し、ESG の観点から投資するよ

う提唱したため、欧米の機関投資家を中心に企業の投資価値を測る新しい評価項目として関心を集めるようになった。¹¹

日本ではまだ馴染みのないものであるが、この ESG 投資は世界的には主流な投資の形になってきているのだ。この仕組みは企業に対してプレッシャーとして働いている。ESG に配慮した言わばクリーンな企業でなければ出資が集まらず資本不足に陥る可能性があり、またこのような枠組みは消費者の購買意識にも影響が出るだろう。以上の観点でグローバル企業を SDGs ムーブメントへと動機付けしているのである。

第二章 SDGs に向き合う浄土真宗

SDGs を浄土真宗の視点から考えるにあたって、重要なポイントは二つである。一つが誰一人取り残さない社会実現にどう関与することができるのかという点。そしてもう一つが浄土真宗の持続可能性とは何なのかという点である。この章では各節にて前者の実現のための実行案を提案していくが、それらを見る前に、まず後者について前置きしておかないといけない。これから長い目を見たときに浄土真宗はその宗教性を通して何を人々に伝えていくのか。また浄土真宗を一つの組織であると見たときにその持続可能性とはいったい何なのか。誰一人取り残さない社会を目指すにあたってまずこの浄土真宗の持続可能性について考えておきたい。

持続可能性とはどのような状態をあらわすのかについては次の二つにまとめられる。一つはその事象が既に持っている価値を維持していくこと。そしてもう一つは、既存の事象に関して新たな価値を見出していく、または付与していくこと。前者について言及すると、日本でも数多く登録されている重要文化財が正しくそれであり、尊ばれるべき文化財

を国が積極的に保護しその価値を持続可能にしている。一方で後者についてはあまり持続可能性のイメージが湧かないかもしれないが、異種の価値観を和えることによって新たな価値を生み出しその事象を持続可能にしていくことを意味する。例えばファッション業界に多くみられるように、既存のスタイルを全く別のモチーフから着想を得てリデザインする。この繰り返しが所謂トレンドであり、ここに価値観の連続性、および持続可能性が生み出されているのである。

以上が持続可能性とは何かであるが、ことに浄土真宗の持続可能性を考えるにあたっては後者の視点に立脚して思考することが重要ではないかと考えている。なぜならば、前者が言う持続可能性についてはその形態が残存市場的¹²であり、それ以降の成長が見込みづらいことにある。重要文化財のように国がその価値を認め、保存に努めてくれるのであれば問題ないが、現状を見るにそれは現実的ではないだろう。さらに言えば、第一章で述べたように人口減少がこれからも続いていく中で、門徒数と収入がニアリーイコールである寺に関しては現状維持すらも難しい。以上のことから、浄土真宗の持続可能性を考えたときに、今ある価値を維持していくのではなく、多様な方面から新たな視点を取り込み、価値観を和えることによって、今までにない価値を作り出していかなければならないのではないだろうか。

よってこの章では、前述の誰一人取り残さない社会実現のための施策を考えるとともに、浄土真宗を持続可能なものにしていくことについても考えていきたい。

第一節 老後の働き口を作る寺

日本では社会保障制度が充実し、医療技術も質が高いことから平均寿

命が非常に高い。さらに言えば、寿命の最頻値で見ると男性であれば 88 歳、女性であれば 91 歳ともなる¹³。そこで出てくる問題とは老後の健康である。ここにおいての健康とはただ単に病気ではないという身体的な健康でなく、WHO が掲げるところのウェルビーイングという意味での健康である。現代の高齢者が抱える問題は非常に多い。第一に社会的な貧しさがあげられる。日本の生活保護受給世帯のうち 47.4%が高齢者¹⁴であるという事実。さらに日本の働き方では持病があり加えて体力が衰えている高齢者ではなかなか就労することが難しく、それがまた貧困からの脱出を妨げる要因にもなっている。第二に精神的な不健康があげられる。日本における高齢者の自殺率は非常に高い。年代別で見ても自殺率は 60 歳以上の割合が最も高い。またその原因として 60%は健康問題であるという統計が出ている¹⁵。ここでいう健康問題とはうつ病などの精神疾患が多い。これらを見れば日本においては長生きすることは十分にできるがその実態をみてみればそれが豊かな老後であるとはいいきれないのではないだろうか。

そこで提案したいのが、老後の働き口を作る寺である。前述したように日本においては何か大病を患うことや事故にあうなどと特別なことがない限りは男女ともに 80 歳近くまでは元気でいられる人が多いはずだ。しかし現代日本においては 65 歳で定年退職させられ仕事を失う。そこで高齢者であっても働けるような環境を寺が提供することで高齢者の社会的、そして精神的な不健康を解消することができるのではないだろうか。働くことはそのまま生きがいへとつながる。また職場が出会いの場ともなりうるし、経済的な貧しさも解消される。もちろん、その働き方には注意を払う必要はある。一般的な就労時間で賃金が発生するような働き方では体力に衰えのある高齢者には厳しく、アウトカムベースの働

き方を作っていかななくてはならないだろう。だがこの問題の解決は高齢者の自死率を下げ、さらに経済的な貧しさも解消へとつながる試みになるだろう。

第二節 浄土真宗が発信できる価値観

この節では次節以降の非認知能力と浄土真宗について論を展開するにあたり、その前提である浄土真宗の教えが持つ価値観について述べていく。

第一項 救われている確信

では最初に「救われている確信」について論述していく。それに伴い、私が浄土真宗教義の中で「救われている確信」の性格があらわれていると思われるものをいくつか挙げていきたい。では初めに親鸞が唱えた現生正定聚についてみていく。

まず、正定聚とはまさしく仏になることが定まったともがらのことを指す。そしてそれは現生においてあらわれる果であると親鸞は唱えたのだ。その現生正定聚を親鸞は真実の証として『教行信証証文類四』で次のように取り上げている。

つつしんで真実の証を顕さば、すなはちこれ利他円満の妙位、無上涅槃の極果なり。すなはちこれ必至滅度の願（第十一願）より出でたり。また証大涅槃の願と名づくるなり。しかるに煩惱成就の凡夫、生死罪濁の群萌、往相回向の心行を獲れば、即のときに大乘正定聚の数に入るなり。正定聚に住するがゆゑに、かならず滅度に至る（『註釈版』307頁）

煩惱具足の凡夫であっても往相回向の心行、つまり阿弥陀仏より回向

された信心と称名を得ることですなわち現生において大乘正定聚の位に就くことができる。また『一念多念文意』でも第十一願成就文を引用し、現生正定聚について言及している。「それ衆生あつて、かの国に生まれんとするものは、みなことごとく正定の聚に住す。」(『註釈版』680頁)ここでは元来、「かの国に生まるれば」と読まれるべきものであったが、親鸞は「かの国に生まれんとするものは」と読み替えて現生にて正定聚の位に入ることを強調している。

『親鸞聖人御消息』15は親鸞が覚念房の最後について書いた消息である。ここにも浄土真宗の救われている確信という性質があらわれているといえる要素がうかがえる。

かくねむぼうの御こと、かたがたあはれに存じ候ふ。親鸞はさきだちまゐらせ候はんずらんと、まぢまゐらせてこそ候ひつるに、さきだたせたまひ候ふこと、申すばかりなく候ふ。かくしんぼう、ふるとしごろは、かならずかならずさきだちてまたせたまひ候ふらん。かならずかならずまゐりあふべく候へば、申すにおよばず候ふ。かくねんぼうの仰せられて候ふやう、すこしも愚老にかはらずおはしまし候へば、かならずかならず一つところへまゐりあふべく候ふ。明年の十月のころまでも生きて候はば、この世の面謁疑なく候ふべし。入道殿の御こころも、すこしもかはらせたまはず候へば、さきだちまゐらせても、まぢまゐらせ候ふべし。(『註釈版』770頁)

この消息では「かならずかならず」という語を親鸞は3回繰り返し述べている。一つ目では「かならずかならずさきだちてまたせたまひ候ふらん」と、亡くなった覚念房が浄土で先に待っているということは間違いないと強調している。阿弥陀仏による救いは確実に、必ず往生できることを述べているのだ。二つ目では「かならずかならずまゐりあふべく

候へば、申すにおよばず候ふ」と、我々もみな浄土に往生することは間違いないと強調している。ここでは先の文で指摘した阿弥陀仏による救いを拡大しており、みな同じように救われることを述べている。そして三つ目では「かならずかならず一つところへまゐりあふべく候ふ」と、親鸞が先だって往生したとしても浄土で必ず待っていることを強調している。これもまた阿弥陀仏の救いによって皆同じように救われ、往生できることを確認しているのだ。

以上のことから、「かならず」という語を二回重ねて使っていることと、三度にわたりみな同じように阿弥陀仏に救われるのだと表現したことから、親鸞が同朋の死をさらには親鸞自身の死をどのように感じ取っていたのかが読み取れる。みな阿弥陀仏によって必ず救われているという確信。この思いが親鸞の心の中には存在していたのだろう。

さて、ここまでで浄土真宗教義の中で救われている確信について焦点をあて、論を進めてきたが、この現生正定聚にみられるような、私は救われているという確固たる思いが生む、浄土真宗が現代人に用意できる価値観、およびものの見方というのが「ありのままの自分でも良い」という価値観であると私は考えている。次はこの「ありのままの自分」という価値観について記述していく。

第二項 ありのままの自分

ありのままの自分でもいいという価値観を説明するにあたり、『歎異抄』第三条に書かれている悪人正機説を取り上げたい。『歎異抄』には次のように記されている。

善人なほもつて往生をとぐ、いはんや悪人をや。しかるを世のひとつねにいはいはく、「悪人なほ往生す、いかにいはんや善人をや」。この

条、一旦そのいはれあるに似たれども、本願他力の意趣にそむけり。
そのゆゑは、自力作善のひとは、ひとへに他力をたのむところかけ
たるあひだ、弥陀の本願にあらず。しかれども、自力のころをひ
るがへして、他力をたのみたてまつれば、真実報土の往生をとぐる
なり。煩惱具足のわれらは、いづれの行にても生死をはなるること
あるべからざるを、あはれみたまひて願をおこしたまふ本意、悪人
成仏のためなれば、他力をたのみたてまつる悪人、もつとも往生の
正因なり。よつて善人だにこそ往生すれ、まして悪人はと、仰せ候
ひき。（『註釈版』833頁）

この悪人正機説とは、悪人こそが阿弥陀が救う正しき目当てである
ということを説いたものである。ここでいう悪人とは一般的にいう悪行を
働く者の事を意味していない。ここでの善人とは自力で修めた善行によ
って往生しようとする人を指し、一方悪人とは煩惱具足の凡夫のことを
指し示す。では阿弥陀仏はこの世の人を善人と悪人に分け、救いの優劣
を作ったのかといえそうでもない。『大経』第十八願にあるように阿弥
陀仏は衆生を一人残らずその一切を救うと誓われているからだ。ゆえに
ここでは救われるには「善行を積まなければ」、「悪行を慎まなければ」
といった善悪の問題ではなく、煩惱にまみれてどうしようもなく苦しん
でいる人にこそ救いのまなざしが向けられていることに気づいてほしい
という思いがこめられているのではないだろうか。したがってここには
ありのままの自分でもよいという価値観がみてとれる。

ここまでで、浄土真宗が現代社会に生きる人々にむけて「ありのまま
の自分でも良い」という価値観を用意できると述べてきた。他者と比較
することなく、自分は自分であると自己を肯定していければ、ストレス
の多い社会の中で生きていくのに非常にいい影響を与えることは間違い

ないはずだ。ただ、わたしはこの価値観を持つことが、ただその人のメンタルケアにつながるだけでは終わらないのではないかと考えている。そこでわたしが取り上げたいのが次節の「非認知能力」である。非認知能力とは認知能力の対義語である。知能検査で測れる知力、および読み書き計算の能力のことを認知能力といい、IQもここに含まれるが、それに対して非認知能力とは検査では測ることのできない粘り強さや自制心、好奇心、やり抜く力、自己肯定感、ストレス対処能力など、いわば心の強さのことを指す能力のことをいう。そしてこの非認知能力、言い換えればその人の性格やメンタルを、浄土真宗はその宗教的な側面から豊かにはぐくむことができるのではないかと私は考えている。よって次節では非認知能力に対して浄土真宗がどのようにむきあうことができるのかを議論していきたい。

第三節 浄土真宗と教育

第一項 非認知能力について

非認知能力は 2000 年にノーベル経済学賞を受賞したシカゴ大学のジェームズ・ジョセフ・ヘックマン教授の幼児教育の研究から注目を浴び始めた。彼の研究にペリー就学前プロジェクトとアベセダリアンプロジェクトがある¹⁶。これらの研究では就学前の幼児に対して非常に親密な介入を行い、子どもの自発性や自制心、自己肯定感を高めることに主眼を置いた教育がなされ、さらには親への子育て支援も行ったという。その結果、就学前の幼児教育を行った子供と行わなかった子供とを比べたところ、前者は後者よりも一貫して良い結果を得ることが分かった。IQこそ高める効果は小さかったが、学校へ行っている率は高く、そのため成績自体も良く、様々な社会的行動も良い影響が見て取れた。また、そ

の良い効果は成長してもなお継続し、月給 2000 ドル以上である割合は対象グループと 22 ポイント、持ち家率は 23 ポイント、生活保護の非受給率は 15 ポイント差が付いた。ここからわかるように、幼児期の早期教育は幼少期の発育を助けるだけでなく、その子の生涯までをもサポートしうるものになると考えられる。さらにこの研究で重要なのはここからで、ヘックマンが分析したところによれば、乳幼児期などの早期教育では、IQ や学力に焦点を当てた教育を施してもその効果は非常に短期的で長期的にその子の頭の良さを保証するものにはなりえなかったのだ。つまりこれらの非常に良い結果をもたらしたのは幼児期の早期教育にてその子たちの頭がよくなったからではないのである。ではいったい早期教育が乳幼児たちの何を育んだのだろうか。それこそが、学習意欲をはじめとする、粘り強さや自制心、といった性格の強み、非認知能力だったのである。この非認知能力を幼児期に適切に、また豊かに育むことさえできれば、その子の将来がより明るいものになるのは確かであるとヘックマンは結論付けたのだ。

また、幼児期に非認知能力を育むことが影響を与えるのはその子の将来の年収や学歴だけではない。上にあげたように非認知能力には粘り強さや自制心、学習意欲のほかにも、自己肯定感やストレス対処能力も含まれる。この能力が子供の間に外的ストレスが原因で十分に育まれず、結果その子の将来の健康状態や精神状態にまで影響を与えることが研究により明らかにされている。アメリカ疾病予防管理センターの医師ロバート・アンダとヴィンセント・フェリッティが 1990 年代に行った研究に、「ACE（子供時代の逆境）の研究」という子供のストレスやトラウマが与える長期的な影響を調べたものがある¹⁷。この研究によれば、被験者が子供のころに経験したトラウマの数とその人が成人後にかかった内

科疾患のあいだに相関関係が見つかった。子供のころに経験したトラウマ（ネグレクトや、虐待、DV を目撃したことや、両親が離婚したこと、家族のうちにアルコール中毒者がいるなどの十項目が調査された。）が一定以上ある場合、がん、心臓病、肝臓病になる確率は2倍、肺気腫や慢性気管支炎になる確率は4倍であった。また健康面だけでなく精神面にもその影響は波及している。子供のころに経験したトラウマが高くなるほど、鬱や不安に悩まされ、自殺や自己破壊的な行為に及ぶ可能性が高くなった。さらにいえばこれはトラウマといった重度のストレスのみが子供に関係するわけではない。オレゴンで行われた研究¹⁸では親の暴力を伴わない口論や、親が子に関心を向けないネグレクトでさえ、子の将来にマイナスの影響を与えることが明らかにされた。

こうした子供時代のストレスが将来の精神、健康に影響を及ぼすのは、そういった環境が子供にこの世は不安定で混沌としていて予測がつかない危険なものであるという世界観を植え付け、子供のストレス反応能力や自己肯定感といった非認知能力に強烈な影響を与えるからである。だが逆に言えば、非認知能力を育むことができれば、その子供の精神は安定し、健康状態も良くなりさらに言えば将来の年収も上がるのである。では次にこの非認知能力を育むためには何をしたらいいのかについて掘り下げていく。

第二項 非認知能力を育むために

非認知能力は認知能力、いわゆる学力のように人が教え伝えることで向上していくものではない。アメリカのジャーナリストであるポール・タフはその著書『私たちは子供に何ができるのか』にて非認知能力を次のように定めている。「非認知能力は子供をとりまく環境の産物である」

¹⁹つまり子供の非認知能力を高めたいのであれば、力を注ぐべきものは当事者自身ではなく、その周りの環境および周囲の人たちとの関係性に目を向けることが重要なのだという。では実際、どのようなアプローチが子供にとって最適なのか。これについて、わたしが特に取り上げたいのが、アタッチメントによって育まれる「心の安全基地」を作ることである。アタッチメントとは愛着のことで、この愛着を子供が親に対して作ることができるようにアプローチする。これによって子供は親と安定した信頼関係を育むことができ、その結果、子は親を心の安全基地として認識するようになるのだ。心の安全基地を作るということはつまりは一切を任せられ、安心できる精神的な居場所を持つということであり、そのことが子供に安心感と自信を与えることができ、成長したときに未知な外の世界へ飛び出すことの後押しをしてくれる。この心の安全基地が自己肯定感、ストレス対処能力といった非認知能力の発達を促すのである。もちろんこの現象は子供に限らず、成人にも適用される。またアタッチメントを感じる対象、および心の安全基地の対象が親に限ることもない。成人であれば、パートナーや親友にまでその範囲を広げることができるだろう。非常に不安定でさらにストレスが多い現代社会で生き行く中で、この心の安全基地を、確固たる自分の心の拠り所として持つておくことはとても有効なメソッドであると考えられよう²⁰。

第三項 浄土真宗における非認知能力の育成

さて現代社会におけるストレスをうまく対処していく方法として非認知能力を育むこと、そしてそれはアタッチメントから生まれる心の安全基地によってアプローチすることができることを論述してきた。これについて、わたしはそれを浄土真宗の視点からでもアプローチすることができる

できるのではないかと考えている。そのために、「救われている確信」が生む「ありのままの自分でも良い」という価値観を取り上げた。つまり、このアタッチメントと心の安全基地をそのまま救われている確信とありのままの自分に置き換えて解釈することができるのではないだろうか。阿弥陀とわたしとの関係性の中に、救いの目当ては紛れもなくこのわたしであり、確かに救われているのだという思いがあるからこそ、強力に安定した関係性が生まれる。そしてこの安定した関係性がありのままの自分でも大丈夫なのだという心の拠り所を作り上げる。もしこの仮説が実際にうまく機能した場合、浄土真宗はいままでそうしてきたように、人々の心に寄り添うような、メンタルにフォーカスを当てた教化活動の域を超えることになりうる。事実として非認知能力が十分に育まれなかったことによってストレスにうまく対処できず鬱の発症や自己肯定感が低いために自己破壊的な行為におよぶ可能性が高くなることから、逆説的に非認知能力をうまく育むことさえできれば鬱やさらに言えば自死についても発生を事前に止められる可能性があるのだ。

第四節 教誨師として

教誨とは刑務所等の矯正施設において受刑者の育成や精神的救済を目的として行われる活動で、教誨を行う人を教誨師と呼ぶ。教誨の活動の歴史については戦前から信教の自由のもと、国からのバックアップを受けながら行われていた。しかしながら戦後にて政教分離の影響を受け、国による後ろ盾を教誨師は失い、今では民間の篤志宗教家として教誨活動をするという形になっている。また法務省のホームページには教誨師を次のように説明している。

矯正施設の被収容者の希望に応じて、民間の篤志宗教家である教誨

師が宗教教誨を行い、信教の自由を保障しつつ精神的安定を与え、
受刑者や少年院在院者等の改善更生と社会復帰に寄与しています

21

つまり、宗教教誨師が目指すべきところは宗教的アプローチによって
被收容者の精神的安定と改善、更生と社会復帰にある。では一体どのよ
うにすれば教誨師がこのゴールを達成することができるのだろうか。そ
れを探るにはまず現在被收容者が陥っている問題、犯罪に起因する要因
について詳しく見るのが肝要であろう。

児童精神科医である宮口幸治はその著書『ケーキの切れない非行少年
たち』にて少年院に收容された非行少年たちの実態について明らかにし
ている。その内容は以下の通りだ。宮口は医療少年院に勤務していた時
に非行に走った子どもたちの中には犯罪をしたという認識自体を持たな
い子どもがかなりの数いるということに気づいた。これはその子どもた
ちが知的障害と断定するに至らない、軽度な知的障害の状態であるから
であるという。つまり子どもたちが非行に走るのは非常にIQ、および認
知能力が低い状態にあることが引き起こしているのだというのである²²。
更生のためには自身の非行を認識し、向き合い、被害者の気持ちを
考え内省することが肝要であるが、実際の少年院の子どもたちは難し
すぎてこの反省以前で立ち行かなくなってしまう。当然、この子どもた
ちは認知能力が育まれていないため簡単な読み書きもできず、見る力や聞
く力も発達しておらず、円滑なコミュニケーションをとることもままな
らない。そのため学校や地域の人たちとの社会的な関係性もうまく対処
することができず、社会的なつながりがストレスともなっていくのであ
る。これが原因となって非行に行き着くのだ²³。

少年院ではこれが現状である。では認知能力が低い子供たちを社会復

帰させるためにはどうしたらいいのか。この問題についてもカギは非認知能力であるとわたしは考える。認知能力やIQを高めるためにはまず、前提として学ぶための土台である精神的な安定、つまり粘り強さや自制心、ストレス対処能力といった非認知能力が育まれていなければならない。ぐらついた心のままではスキルを身に着けようにも困難が生じるということである。このことをニューヨークの非営利団体<ターンアラウンド・フォー・チルドレン>に所属するブルック・スタフォード・ブリザールは2016年に作成した報告書の中で「学習のための積み木」²⁴という言葉を使って説明した。学習のための積み木によれば、レジリエンス、好奇心、学業への粘りといった高次の非認知能力はまず、土台となる実行機能、つまり自己認識能力や人間関係をつくる能力などが発達していないと身に着けるのが難しい。またこうした能力もアタッチメントやストレスを管理する能力、自制心といった基幹の上に成り立つ。つまり、学習のための積み木を使って少年院の子供たちの問題を説明すれば、軽度の知的障害に相当する認知能力、IQの低さはそれを育むために備わっていないなければならない、非認知能力が十分に成長していないことに原因があると捉えられるのだ。

以上を踏まえることでようやく宗教教誨師が非行少年たちへできるアプローチの形が見えてきた。非行に走った子供たちは今まで生きてきた中で非認知能力が育まれず、この世は不安定で混沌としていて予測がつかない危険なものであるという世界観の中で生きてきた。そこに浄土真宗本願寺派の教誨師が、どんな自分であってもありのままに受け入れ、確かに救ってくれる阿弥陀の存在、そしてその存在にすべてを任しきるといふ心の安全基地を示してあげることができれば、着実に子どもたちは心を強くしていくことができ、その後社会に出てからもうまく生きて

いくことができるのではないだろうか。

第五節 寺院と医療

現代医学の発展には目覚ましいものがある。日本の平均寿命は男女ともに 80 歳を超えている。また 2050 年代までにがんが根絶されると考える学者もいる²⁵。2040 年代には人間の平均寿命は 100 歳に到達する予測もある²⁶。さらに言えば老化のメカニズムも解明され不老長寿が実現する可能性も考えられる²⁷。もしそのような時代が来たときに、今までとは比較にならないほどに、私たちは老後の人生を過ごすことになる。ともなれば、そこでの生きがい、老人の QOL、そしてウェルビーイングの意味での健康は将来どうなっていくののだろうかと考えていかなければならない。そしてもしそうなるのであれば今度は病気以外で死ぬということが死因の第一位になってくる可能性が高いのではないだろうか。そこにはおそらく心の健康を担保する、支える組織が必要となってくるはずである。浄土真宗はその精神的な苦しみに寄り添える貴重な組織であることは間違いないであろう。

また寺院のサステナビリティを考えたときに、これから先の寺院の役割として医療現場になることはできないが病院と患者のインターフェイスになることを提案できるのではないだろうか。寺はその昔周辺地域の戸籍を管理していた名残から地域に根差した立地であることが多い。そこで病院に行く前の簡易的な診察を寺が担うことができればより迅速にかつ多くの人々を対応することができるため、結果として助かる人が増え医療現場の負担も軽減することができるのではないだろうか。ロボティクス、IoT、AI の技術が発達し、今ではベテランの医師が診察するよりも機械が診断したほうが病気の発見率が高いという研究結果も発表さ

れている²⁸。また5Gによる通信技術の発達から遠隔の治療に関しても前向きな結果が出始めている²⁹。何十年後かには医療現場と家庭が結びつくような技術の進歩がみられるだろうが、その前の段階として寺が病院と患者をつなぐ窓口になりうる可能性は十分に考えられる。

結論

SDGsに向き合う浄土真宗としてこれまでに様々な視点から現代が抱える問題について浄土真宗の立場から考察してきた。現代ではコロナウィルスの流行から、テールリスクも考慮しなければならないような時代である。変化が未知数の時代だとも言える。その中で重要なのは一貫した理念と柔軟性だ。昨日まで当たり前だと思っていた日常が突然非日常へと変わる。このような社会では正解というものは存在しない。リテラシーを高めることで、数ある玉石混交の情報の中から玉を探し当てるといった段階はもうすでに越しており、玉があるかさえも怪しい莫大な情報の中でそれらを咀嚼し自身の考えを構築することが重要な時代へと突入しているのだ。だとすれば考えられうる現代社会の攻略方法とは、「どのような未来を形作っていきたいか」という目標を定め、そのゴールに向かって柔軟に時代の変化に合わせてながら一つ一つ着実にコマを進めることである。その一貫性の一つの形として今回取り上げたSDGsという枠組み、誰一人取り残さないというゴールがある。そして柔軟性とは第二章で取り上げた様々なアプローチそのものである。このSDGsが掲げる誰一人取り残さない社会実現の達成は一筋縄ではいかないが、小さなことからでもアクションを起こしていけば必ず未来は変えられるだろう。

そして浄土真宗は確実にその一端を担うことができるはずだ。もうすでに世界は格差のない社会のために行動を始めている。浄土真宗もこの流れに乗り遅れてはいけない。

また今回、SDGs を取り上げるにあたって、浄土真宗の持続可能性についても考察した。これから先の未来、10年20年と見たときに、浄土真宗はその未来の日本において、残るべき価値として存続し続けているのだろうか。そう考えた時、重要なのは能動的に発信し続けていくことである。浄土真宗が数ある信仰の中の一つの選択肢である以上、複雑に多様化するこれからの社会では、何か行動しなければ多様性に埋もれるだけである。しかし、誰一人取り残さない社会実現という大きな夢を掲げるなど、魅力的なアクションを起こしていける組織であれば、今まで浄土真宗を知らなかった人でも興味をもち、同じ志を持ってくれるようになる可能性だって十分にある。改めて言うが、持続可能性を浄土真宗で考えるのであれば、残存市場になってはならない。魅力ある成長市場になることを浄土真宗は目指していかなければならないのだ。

またアクションを起こすには今でなければ意味がない。柔軟なアイデアとは確立の問題であり、多様で、かつ豊かな人材が必要不可欠であるが、僧侶の数も減少傾向にある昨今の浄土真宗では今を逃せば今後さらに厳しい状態になってしまうだろう。団体を盛り上げようとしているのに一番熱心な層の人材が少なくなっているのは非常に心もとない。今行動を起こすことが重要なのだ。

SDGs のゴールは 2030 年だが、はたしてその 9 年後の世界はどのようになっているのだろうか。今からは何もわからないが、私たち一人一人が引き起こしたアクションが実を結び、誰一人取り残さない社会が実現されていればと心から思う。

註

¹ 外務省ホームページ、SDGsとは？

<https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/sdgs/about/index.html>

2020年10月21日アクセス

² KeidanrenSDGsホームページ、What is Society5.0

<https://www.keidanrensdgs.com/society-5-0-jp> 2020年11月1日アクセス

³ 安宅和人『シン・ニホン—AI×データ時代における日本の再生と人材育成—』50頁—60頁

⁴ 外務省ホームページ、SDGsとは？SDGsの概要及び達成に向けた日本の取組（PDF）、2頁

https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/sdgs/pdf/sdgs_gaiyou_202009.pdf 2020年11月5日アクセス

⁵ 外務省ホームページ、ミレニアム開発目標（MDGs）

<https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/doukou/mdgs.html> 2020年12月5日アクセス

⁶ ウィキペディア、Apple

[https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%A2%E3%83%83%E3%83%97%E3%83%AB_\(%E4%BC%81%E6%A5%AD\)](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%A2%E3%83%83%E3%83%97%E3%83%AB_(%E4%BC%81%E6%A5%AD)) 2020年1月3日アクセス

⁷ AppleJapanホームページ、環境

<https://www.apple.com/jp/environment/> 2020年11月29日アクセス

⁸ Mercedes-Benz LIVE! メルセデスが提唱するクルマの新たな価値

「CASE」 https://mb-live.jp/special-2/motorshow/motorshow-2017-10-20/#page_4 2020年11月30日アクセス

⁹ MaaSとはMobility as a Serviceの略称である。

¹⁰ TOYOTA、SDGsへの取り組み

<https://global.toyota/jp/sustainability/sdgs/> 2020年11月30日アクセス

¹¹ コトバンク、ESG投資

<https://kotobank.jp/word/ESG%E6%8A%95%E8%B3%87-1611233>

2020年12月22日アクセス

¹² 残存市場とは、市場規模が大きくなっている市場のことを成長市場

というのに対して、市場規模が成長せず、なくならないで残ることしかできていない市場のことを指す。

¹³ 厚生労働省ホームページ、平成 30 年簡易生命表男女 (PDF)

<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/life/life18/dl/life18-06.pdf>

<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/life/life18/dl/life18-07.pdf>

2020 年 11 月 11 日アクセス

¹⁴ 厚生労働省ホームページ、生活保護制度について (PDF)、22 頁

https://www.mhlw.go.jp/topics/2020/01/dl/9_shakaiengo-03.pdf

2020 年 11 月 21 日アクセス

¹⁵ 警察庁ホームページ、令和元年中における自殺の状況 (PDF)、5 頁、9 頁

https://www.npa.go.jp/safetylife/seianki/jisatsu/R02/R01_jisatuno_joukyou.pdf

¹⁶ ジェームズ・ジョセフ・ヘックマン、古草秀子訳『幼児教育の経済学』30 頁－33 頁

¹⁷ ジェームズ・ジョセフ・ヘックマン、古草秀子訳『幼児教育の経済学』24 頁－28 頁

¹⁸ ポール・タフ、高山真由美訳『私たちは子どもに何ができるのか－非認知能力を育み、格差に挑む－』40 頁

¹⁹ ポール・タフ、高山真由美訳『私たちは子どもに何ができるのか－非認知能力を育み、格差に挑む－』27 頁

²⁰ ポール・タフ、高山真由美訳『私たちは子どもに何ができるのか－非認知能力を育み、格差に挑む－』50 頁－56 頁

²¹ 法務省、矯正を支えるボランティア

http://www.moj.go.jp/kyousei1/kyousei_kyousei09.html 2020 年 10 月 22 日アクセス

²² 宮口幸治『ケーキの切れない非行少年たち』17 頁－22 頁

²³ 宮口幸治『ケーキの切れない非行少年たち』23 頁－31 頁

²⁴ TURNAROUND FOR CHILDREN building blocks for learning

<https://turnaroundusa.org/what-we-do/tools/building-blocks/> 2020 年 12 月 1 日アクセス

²⁵ University College London, By 2050 no one under 80 will be dying from cancer, study says UCL Cancer

Study <https://www.ucl.ac.uk/consultants/news/2015/jan/2050-no-one-under-80-will-be-dying-cancer-study-says-ucl-cancer-study> 2020 年

12 月 22 日アクセス

²⁶ 落合陽一『2030 年の世界地図帳』76 頁

²⁷ NewsPicks「若返りはここまで科学されている。」
<https://newspicks.com/news/4966156/body> 2020年6月6日アクセス

²⁸ NHK健康チャンネル「AI（人工知能）が大腸がんの診断をサポート」
https://www.nhk.or.jp/kenko/atc_963.html 2020年12月22日アクセス

²⁹ 上尾中央総合病院、内視鏡手術支援ロボット「ダヴィンチ」
<https://www.ach.or.jp/about/daVinci/> 2020年12月22日アクセス

参考文献

記事

公益財団法人全日本仏教会 WFB（世界仏教徒連盟）日本センターホームページ、全国教誨師連盟について

http://www.jbf.ne.jp/event/prison_chaplain.html

法務省ホームページ、矯正を支えるボランティア

http://www.moj.go.jp/kyouseil/kyousei_kyouse09.html

書籍

安宅和人『シン・ニホン—AI×データ時代における日本の再生と人材育成—』株式会社ニューズピックス、2020年

阿満利麿『日本人はなぜ無宗教なのか』ちくま新書、1996年

池上彰『池上彰の宗教が分かれば世界が見える』文春新書、2011年

落合陽一『2030年の世界地図帳』SBクリエイティブ株式会社、2019年

小原克博、佐々木閑『宗教は現代人を救えるか—仏教の視点、キリスト教の思考—』平凡社、2020年

佐々木閑『大乘仏教—こうして仏陀の教えは変容した—』NHK出版、2017年
ジェームズ・ジョセフ・ヘックマン、古草秀子訳『幼児教育の経済学』東洋

経済新報社、2015年

ダナ・サスキンド、掛札逸美訳『3000万語の格差—赤ちゃんの脳をつくる、

親と保育者の話しかけ—』明石書店、2018年

ボーク重子『「非認知能力」の育て方—心の強い幸せな子になる0～10歳の

家庭教育—』小学館、2018年

ポール・タフ、高山真由美訳『成功する子失敗する子—何が「その後の人

生」を決めるのか』英治出版、2013年

ポール・タフ、高山真由美訳『私たちは子どもに何ができるのか—非認知能

力を育み、格差に挑む—』英治出版、2017年

宮口幸治『ケーキの切れない非行少年たち』新潮新書、2019年

宮崎哲弥、佐々木閑『ごまかさない仏教—仏・法・僧から問い直す—』新潮

選書、2017年